温泉科学（J. Hot Spring Sci.），68，141-148（2018）

日本温泉科学会第 71 回大会

公開講演　II

温泉の日本史と別府

石　川　理　夫[1)]

（平成 30 年 10 月 16 日受付，平成 30 年 11 月 24 日受理）

The Characteristic History of Hot Springs in Japan and Beppu

Michio Ishikawa[1)]

要　　旨

別府は日本を代表する温泉地域であるが，その歴史や温泉文化の特色については，これまでよく検証され，理解されているとは言い難い．温泉資源の豊かさ，熱泉の湧出状況といった共通性を持つ別府と熱海は，古代の人々にインパクトを与えて，共通の地名をもたらした．道後温泉と別府の温泉に言及した『伊予国風土記』逸文とされる，よく知られた史料の解釈については，なお誤りが両温泉地で流布されている．そして別府の温泉資源利用と温泉入浴文化を促した要因としての，仏教の影響と，共同湯文化を今日的に再評価すべきであろう．

キーワード：古地名，風土記，仏教，一遍上人，共同湯

1.　はじめに

温泉資源を人が利用することによって長い時間をかけて育まれてきた温泉地という場・空間は，温泉の歴史・文化，さらには特性といったものを育む場である．温泉という分野はこの温泉地を全体として対象化することで，総合的な科学・学問の探求対象となり，したがって学際的な特徴を持つ．

その中で温泉の歴史・文化史など人文社会科学分野からのアプローチは，自然科学分野に比べるとこれまではるかに限られていた．しかしながら地域住民・国民だけでなく海外からの観光客も，日本の温泉資源の特色ある魅力に惹かれ，温泉地を数多く訪れている今日，温泉地域の振興・活性化のためにも温泉地が持つ歴史的文化的蓄積を再評価していくべきだろう．

なかでも別府は日本最大級の温泉エリアであるが，別府の温泉地域としての歴史や温泉文化につ

[1)]温泉評論家・日本温泉地域学会会長．[1)]Critic of Hot Spring, President of Regional Science Association of Spas, Japan.

いても，よく検証され，理解されているとは言い難い．あらためてその特色や魅力を引き出し，郷土史教育や観光経済面にも活用していければと考える．

2.　温泉資源状況を示唆する古代の地名

2.1 「あだ（た）み（敵見）」と「あたみ（熱海）」

今では著名な温泉地でも，古くはどのような状況であったかを知ることは，温泉について言及した古代の史料が限られているため，多くの場合難しい．その中で温泉の存在と湧出状況をうかがう重要な道しるべの一つとなるのが古代の地名である．一例は，平安時代の承平年間（931 ～ 37）に源順が撰述した『倭名類聚抄』でも二十巻本で，その巻五「国郡部」で国別に郡・郷名を記載している．

記載された中で，「伊豫国温泉郡（ゆのこおり）」と唯一，郡名から温泉の所在がわかるのが愛媛県道後温泉である．郷名では，但馬国二方郡「温泉郷」（兵庫県湯村温泉），石見国邇摩郡「湯泉郷」（島根県温泉津温泉），肥後国山鹿郡「温泉郷」（熊本県山鹿温泉）の 3 カ所ある．その中で別府地域は「速見郡朝見郷」と記されているが,『日本書紀』に続く国史として平安初期に編纂された『続日本紀』宝亀 3 年（772）10 月条に，「豊後国速見郡敵見郷で前年 5 月 23 日，山崩れによる災害が起きた」と記すとおり，「朝見」は元は「敵見」と表記されており，「あだみ／あたみ」郷と読んでいた．「あだ／あた」という読みに当てた「敵」の字が嫌われ，後に「朝」に変えたのである．したがって現在では「あさみ」と呼ばれているが, 元は「あだみ／あたみ」と呼ばれた地名であった．

一方，静岡県伊豆半島東海岸の熱海温泉地域は，古代の伊豆国田方郡の 13 の郷名中該当するのが「直見」郷である（『熱海市史』上巻，1967）．かつてこの「直見」という郷名・地名をどう読むべきか，『倭名類聚抄』平安末期書写本の訓注の写し間違いの問題を含めて思案が続いた．結論的には，「直」は「値」と同義語でもあり，「あたい」とも読む．同書の各国郡･郷名中にはほかにも，和泉国和泉郡「山直」郷の訓注として，「やま・あたひ（い）」の転訛で「やまたへ」と読ませている例が見られる．古代の伊豆国国造氏族の姓が「日下部直（あたい）」であったように，姓の「直」は「あたい」と読まれていた．つまり古代の熱海温泉地域の郷名･地名である「直見」は「あたい･み」の転訛で「あたみ」と読むのが妥当であった（『熱海温泉誌』，2017）．

事実，熱海温泉地域をさす地名「直見」は鎌倉時代に入ると，史料に「阿多美」（『吾妻鏡』建保元年〔1213〕12 月 18 日条）と表記される．別の漢字を当ててより正確に音で「あたみ」という地名を表している．さらに「安多美湯」（真名本『曾我物語』）として，熱海温泉の存在が歴史上の人物の温泉利用の記述をもって史料に初出する．「あたみ」を現在のように「熱海」と漢字表記するのは，鎌倉幕府の執権・北条氏から走湯山（現・伊豆山温泉の走湯信仰に由来する現・伊豆山神社）にあてた永仁 5（1297）年の文書が初めてとされる（髙橋一樹，2017）．

後世の文献に登場する熱海の開湯伝承では，奈良時代の開湯ということになっている．この開湯伝承と史料による温泉利用記録初出との大きなタイムラグに，共通する地名に表された別府と熱海の温泉資源・湧出状況の厳しさと温泉利用の立ち遅れを読みとることができる．

2.2　海辺の熱泉湧出と利用の困難性，その変化

そもそも熱水・温水や熱い海を「あたみ」と読み表す．別府では，陸部の鉄輪地獄に代表される熱泉噴出と高温地熱・噴気地帯と同時に，江戸初期の図説百科辞書『和漢三才図会』の「海泉」項に「豊後別府村の硫黄洋の海辺に温泉が有って，満潮時は海中となる」と紹介されたように，海辺にも高温泉が湧いていた．熱海では，平安後期に三井寺の僧・実睿の著に始まって鎌倉時代の僧・

忍性も編纂にかかわったとされる『地蔵菩薩霊験記』に，「ここに熱海という所あり．谷深くして猛火熾盛の煙（熱泉の湯煙）峯を埋めて晴れやらず，烟熱流失して熱泉は谷にたたえて波を焼…」「熱海は炎熱地獄」とまで描写されたように，熱泉が三方を山に囲まれた谷間の海岸部や海中より湧き出て，人々を苦しめたという．

温泉の恵みというには程遠い，古代におけるこの熾烈な温泉資源状況，湧出現象が熱い水，熱い海を表す「あたみ」という共通する地名を生んだ．古くからの地名が，どちらも有数かつ特異な湧出現象を持つ温泉地域であることを教えてくれるが，それが長い間，温泉を利用できない状態を招来させた．

別府については後述する．熱海の場合は，江戸時代に入ってよく文献で紹介された熱海開湯伝承に，「むかし，熱湯が海中に湧き出ていて魚類も棲みつかず，里人は困っていたが，奈良時代半ばに箱根権現の万巻上人が来て，法力で泉源を陸上に移したので，温泉を利用できるようになった」（『熱海温泉図彙』，1830）とある，温泉利用の変化に関する部分はあながち伝承にとどまらないようである．

考えられるのは，主泉源の湧出場所が，以前の海中あるいは海岸部から断層に沿っての陸地側へ実際に移動したことである．熱海地域は，活断層のほかにも小規模の断層や断裂が発達し，高度に破砕されていると言える（由佐悠紀，2017 年），熱源と温泉水系に恵まれた土地である．主泉源の陸地への移動とともに，主泉源の湧出現象も変化したと思われる．江戸時代に入って本湯，次に大湯と呼ばれる主泉源の顕著な間欠泉現象は，中世に熱海を訪れた禅僧の漢詩の描写から次第に間欠泉現象を示していく様子がうかがえる．

主泉源の温泉利用が可能になって，熱泉湧出は，伝承に言う人々を苦しめた状況から人々に恵みを与えるように変化した．それにより温泉信仰の対象に転じたことが，時代的には各国別に神階帳が作成され，各国庁に保管される平安時代の末以降，南北朝時代の「康永 2 年（1343）12 月 25 日」という年月日を記した『伊豆国神階帳』に「従四位上熱海の湯明神」が記載されていることに示されている．

3.　記紀の時代の文献と温泉

3.1　記紀の時代の文献に記された温泉

一般的に《記紀の時代に温泉が記述されるようになった》と言われるが，各文献ごとに登場する温泉の名称や内容の違い，変化など，歴史時代に入った日本の温泉史草創期への丁寧な理解が求められる．

現存文献で 712 年と成立年代が最も早い『古事記』に登場するのは，「伊余湯（いよのゆ）」と表記される道後温泉のみで，しかも温泉利用ではなく，5 世紀半ば頃の允恭天皇の皇太子の流刑先とされている．720 年成立の『日本書紀』には，「有間温湯」「有間温湯宮」（有馬），「伊予温湯宮」（道後），「牟婁温湯」「紀温湯」（白浜）のいわゆる三古湯のほかに，「束間温湯（つかまのゆ）」（長野県美ヶ原温泉）も登場する．『日本書紀』では，温泉地は「〇〇温湯（湯泉）」と表記され，「温泉」という用語が初登場するのは天平 5 年（733）にできた『出雲国風土記』以降である．すなわち日本の文献で温泉関連でも早いのは「湯」が付く言葉（湯，湯泉，温湯）であり，「温泉」は後発となる．「ゆ」は体内からの温かい分泌物をも表す，身体感覚にかかわる始原的な言葉で，温泉の湧出現象も言い表しやすかったと考えられる（石川，2018）．

3.2 『風土記』が記す温泉の誕生と特色

『出雲国風土記』と同じ古風土記の『豊後国風土記』には，別府をはじめ温泉の詳しい情報が多いことは知られていよう．「赤湯の泉」は湯の色が赤く泥土を含み，入浴用ではなく家の柱を塗るために利用されていること，後の地名「鉄輪」を示唆する「河直山」の東崖にあるという「玖倍理湯井（くべりゆのい）」では，湯の色が黒くて湯気は燃え盛る火のように熱くて近づくことすらできず，周囲の草木も枯れしおれ，人が近づいて大声をあげると「驚き鳴りて涌き騰がる」と記し，間欠泉現象を示している．

『豊後国風土記』は，天武天皇時代の678年に「日田郡」の「五馬山」のあたりで大きな地震とともに崩れ落ちた山峡から熱泉が間欠泉でほとばしり，紺色をした温泉が誕生した瞬間も報告している．地理的にも温泉の性状からしても，これは自然湧出泉を現在も含む硫化水素泉が湧出している日田市天ヶ瀬温泉に比定される．温泉誕生について記述した古代の史料例ではほかにも，4番目の国史『続日本後紀』に承和4年（837）4月16日，宮城県鳴子温泉郷の川渡温泉と鳴子温泉のカルデラ湖・潟沼が誕生した経過が報告されている．

古風土記は『出雲国風土記』と『肥前国風土記』を含めて，以上のように湯の色や析出物の多彩さ，間欠泉現象，酸性泉や硫黄泉，炭酸泉などと考えられる泉質の多様性，火山性温泉に恵まれた日本の温泉資源の特色，さらには入浴以外の温泉利用法などを見事に活写しており，古代の貴重な史料となる．

4. 「速見の湯」が登場する『伊予国風土記』逸文の問題

4.1 温泉の神と伝承，記紀神話

古い時代の温泉地に関しては，発見・開湯やゆかりの人物などに伝承が多い．ただし，文献記録や物的証拠の裏付けはなく，発見伝説･開湯伝承の代表的な3つのパターン（類型），動物発見伝説，高僧発見伝説，武将発見伝説に応じた，それが生まれる温泉地の土地条件，歴史背景や温泉信仰のありようへの検証が必要である．たとえば，古くから山岳信仰の霊山･霊場が近くにあった温泉地，温泉寺がある温泉地は高僧発見伝説を生みやすい素地がある．

別府でいえば，戦前刊行の『別府市誌』をはじめ，九州の温泉地には景行天皇征西にかかわる話が散見されるが，景行天皇自体が神話的世界の存在である．それを前提にしても，『日本書紀』景行天皇条には，九州において冷たい湧泉に出会った話は出てくるが，総じて記紀の神話時代に温泉にかかわる話は一切登場しない．

これは温泉の神についても言える．今日では温泉神社の祭神として最もよく知られるのは，大己貴命（おおなむちのみこと／大穴持命／大国主命）と少彦名命（すくなひこなのみこと／宿奈毗古那命）の二神だが，記紀や古風土記の中で二神が温泉にかかわったり，温泉の神として登場することは一切ない．

平安時代の延長5年（927）に撰上された『延喜式』の神名帳には全国の神社一覧が初めて記載され，延喜式内社と言われる．その中には「温泉神社」「湯泉神社」「御湯神社」ほか多様な名称の温泉神社が10社ほど含まれている．誤解されているが，温泉神社の祭神などというものは後世の，相殿で祀られるようになった後発の“温泉神”である．そもそも神社名とは，その名前の神を祀る社（やしろ）を意味しており，神社名を載せれば祭神名を挙げる必要はない．

したがって温泉神社も湯泉神社も御湯神社も，温泉・湯泉（ゆ）の神，より尊称の御湯（みゆ）を祀る社（やしろ）という意味であり，それ以外“温泉神”などというものがあるはずはなかった．したがって大己貴命と少彦名命が温泉神社の後発の祭神として相殿で，あるいは本来の温泉（ゆ）

の神に取って代わって祀られるようになるのも，後世のことである（石川，2015）.

4.2　誤訳で主客転倒した少彦名命と大己貴命

その大己貴命（大穴持命）と少彦名命（宿奈毗古那命）の二神が温泉にかかわって初めて文献に登場するのは，鎌倉時代の２つの文献に収められた，その中で『伊予国風土記』逸文とした断片的な文章「湯郡」においてである．そこには後世の影響，改変も考えられよう．しかも当の道後温泉のみならず，「速見の湯」が引き合いに出された別府にとっても看過できないのは，漢文体のこの一文を現代訳する際，二神の立場，役割にかかわる最も肝心な所で致命的な誤訳による間違った解釈が流布していることである．

表　『伊予国風土記』逸文が示す二神の立場と役割

原　文	正しい現代訳	誤訳により流布された解釈
大穴持命、見㆓悔恥㆒而、宿奈毗古那命、欲㆑活而、大分速見湯、自㆓下樋㆒持度来、以㆓宿奈毗古奈命㆒而、漬浴者、暫間有活起居。然詠曰「真暫寝哉」。践健跡処、今在㆓湯中石上㆒也 ［付記：ゴシックと返り点は筆者］	**大穴持命が悔い恥しめられて**（＝後悔するほどはずかしめられ失神して）いたので、**宿奈毗古那命は（大穴持命を）活かそうとして**、大分速見の湯を下樋で持って来て、**宿奈毗古那命が（大穴持命を）漬浴（ゆあみ）させたら**、暫（しばし）の間が有って（**大穴持命は**）よみがえ（活起）った。そうして（**大穴持命が**）『暫くの間寝たことよ』と言って、雄叫びして踏（践）みつけた跡が今も湯の中の石の上に在る	**大穴持命は、宿奈毗古那命が悔い恥じている（失神状態にある）のを見て、活かそうと思い**、（左と同じところ中略）**宿奈毗古那命を漬浴（ゆあみ）させたら、宿奈毗古那命がよみがえり**、「ああ、よく寝たことよ」と言って、踏みたたいた跡が今も湯の中の石の上に在る
二神の立場	**宿奈毗古那命（少彦名命）**	**大穴持命（大己貴命）**
	治癒力を発揮する温泉神としては主神。この一文でも、温泉で大穴持命をよみがえらせた主役を演じている	**神話世界で繰り返し、他者に助けられてよみがえる英雄神。温泉神としてはむしろ従神である**

（注）石川（2015）より一部改変.

それは「大穴持命，**見**㆓悔恥㆒而，宿奈毗古那命，欲㆑活而…」（返り点とゴシックは筆者）という冒頭の一節で，「**見**」はここでは「被」と同じく受身形の「…られる」として用いられている．したがって正しい現代訳は，「大穴持命が悔い恥**しめられて**（後悔するほどはずかしめられ失神して）いたので，宿奈毗古那命は（大穴持命を）活かそうとして…」となる．すなわち「速見の湯」，別府の温泉を下樋で持ってきた道後の温泉を用いて大穴持命を湯浴みさせて蘇生させた主役は，宿奈毗古那命である．こうしてよみがえった大穴持命が「ああ，よく寝たことよ」と言って，雄叫びして石を踏みつけたので，「跡が残った」のである．

ところが，この受身形の「見」を動詞の「見る」と間違えて誤訳すると，「大穴持命は，（宿奈毗古那命が）悔い恥じているのを**見て**，活かそうと思い…」と，助ける主役・主語が大穴持命に変わり，失神して助けられ，温泉に湯浴みさせられてよみがえる脇役・が宿奈毗古那命へと，主客転倒

してしまう．『古事記』の出雲神話でとても小さな神として紹介される宿奈毗古那命が，この誤訳だと“よみがえって石を踏みつけたら跡が残る”などとあり得ない話になってしまう．

出雲神話が物語る大穴持命（大国主命）は，たえず打ちのめされてはだれかの助けを借りてよみがえる英雄神の性格が濃い．その蘇生をこのたび助けたのが，宿奈毗古那命（少彦名命）と温泉というのが核心である．主役は少彦名命（宿奈毗古那命）で，温泉の神によりふさわしい．温泉を治癒に活かす話を通じて二神が温泉信仰に登場するのは,『日本書紀』に「病を療（おさ）むる方（さま）を定む」とあり，あまねく生きものを病から救う医療神と目されたからである．

5.　仏教が温泉文化と別府に及ぼした影響

5.1　仏教が規定した入浴作法

仏教伝来は日本の温泉・入浴文化にも大きな影響をもたらした．正倉院文書に含まれる『仏説温室（うんしつ）洗浴衆僧経』は入浴の功徳とそのための作法を規定した経典で，入浴の際に用いる「七物」の一つとして「内衣（ゆかたびら）」,浴衣着用の入浴を指示している．浴衣は後に湯具（男性は湯ふんどし，女性は湯文字＝腰巻）着用に簡素化されるが，何らかの湯具着用がそれから一千年以上の間，温泉を含む入浴時の規範となった．手ぬぐい一枚の全裸入浴が一般化するのは江戸後期以降で,《はだか入浴が日本の伝統》というのは入浴文化の歴史と変遷を知らない，単なる思い込みにすぎない．

このほかにも仏教と温泉のかかわりをいくつか指摘できる．第一は，病気から衆生を救う医薬・治癒の仏とみなされた薬師如来が温泉信仰に重要な役割を占めるようになり，薬師仏を本尊とする温泉寺･薬師堂が温泉地に建てられ，温泉地景観の重要な要素となったことである．第二は，開湯･温泉発見伝承に高僧発見伝説という大きなパターン（類型）を生み出したことである．第三は，寺院が直接泉源と温泉浴場を経営管理する「寺湯」を生んだことである．歴史的事例として，福島県熱塩温泉，栃木県日光湯元温泉，新潟県出湯温泉，山口県長門湯本温泉が挙げられる．

ほかにも第四として，人々が温泉を見つめるまなざしにも影響を及ぼした．平安時代の『今昔物語集』には，熱泉たぎる泉源地帯の立山（地獄谷）を死者が堕ちる「地獄」とみなす地獄観を生む一方で，温泉の治癒力・恵みに期待して観音様が温泉浴場（『日本書紀』の「東間温湯」の美ヶ原温泉）を訪れる夢を地元の人が見たとして，浴場の周囲をきれいに花で飾る地上の「極楽」とする極楽観も描写している．地獄とも極楽ともなる場という複眼的な温泉へのまなざしが，古代から育まれたのである．

5.2　一遍上人による別府の温泉利用開発

別府では，鎌倉時代に九州を遊行した時宗の開祖・一遍が四国に戻ろうとした弘安元年（1278），守護の三代大友頼泰が帰依し，交流が生まれた（『一遍聖絵』第四の詞書，1299）．一方,『一遍聖絵』より時代がずっと下ってまとめられた『一遍上人年譜略』の建治２年（1276）の項には，豊後の鶴見岳に至った一遍と温泉との出会いが「熊野権現方便の湯」として語られている．いずれにせよ一遍のこの九州遊行（1276 ～ 1278）中の豊後国守護大友頼泰との出会いと交流の過程で，これまで利用法を見いだせなかった鉄輪地獄の温泉開発の道が開かれたとみられる．

そのかぎは温泉に入る入浴法ではなく，地熱地帯に石風呂を設けて蒸し風呂として活用することにあった．これは瀬戸内沿岸地方にも普及していた石風呂，かま風呂など熱気・蒸気浴の応用である．伊予国の豪族河野氏一族で道後温泉のある温泉郡生まれの一遍は，蒸し風呂と温泉の療養効果を熟知していた．折しも時期は大友頼泰が陣頭指揮をとって抗戦した元寇の文永の役（1274）と弘

安の役（1281）の間で，戦傷病者の療養に別府の温泉を活用する方策を大友頼泰に伝える必要性もあった．

大友頼泰は一遍上人の幼名「松寿」に因む松寿寺（現永福寺）を鉄輪の蒸し湯，渋の湯，熱の湯前に建立，寄進したと伝わる．その一角は寺湯さながらの情景だったであろう．時宗は豊後・豊前国に広まり，念仏踊りと温泉の利用は人々の娯楽，救いとなった．中世の別府の温泉は松寿寺の湯聖（ゆひじり）や念仏聖によって喧伝され，栄えたとされる（『別府温泉史』，1963）が，鎌倉時代の熊野権現信仰の聖をはじめ湯聖の温泉地への浸透と活動は有馬温泉や箱根の温泉など各地に見られる．

別府は豊かな温泉資源とこのように歴史的に蓄積されていく温泉文化に育まれて，日本で最も多彩な温泉利用法を保つ．貝原益軒が『豊国紀行』（1694）に記したように干潮時に入浴できる「潮湯」もあったが，現在は湯浴や飲泉法に加えて，打たせ湯，箱蒸し足湯，砂湯，泥湯，蒸し湯が備わっている．天然の泥湯，蒸し風呂に加えて，砂湯を含めた三つがすべて体験できる温泉地は全国でも別府だけであり，これらの温泉利用法は貴重な健康資源及びヘルスツーリズムに活かせる観光資源となる．

別府を中心に大分県は，仏教の影響色濃い温泉文化が全国でもひときわ花開き，今日まで保たれている貴重なエリアである．大半の共同湯や温泉浴場の入口や傍らに薬師仏や地蔵尊が祀られ，神仏の恵みたる温泉とその治癒力への感謝や願いを込めて地元の人がお参りしてから入浴する情景は象徴的で，温泉信仰が息づいていることを感じとれる．これに関連して『別府市誌』（2003）は，「別府の場合，温泉と薬師信仰は少なくとも平安時代から強く結びついていた」と述べている．

6.　共同浴場を大切にする風土

6. 1　共同浴場数最多の別府市

歴史的に形成された別府のもう一つの特色は，地域住民に支えられた共同湯・共同浴場の多さ，身近さである．『別府市誌』（2003）は，市内の共同浴場を市有市営温泉 18，その他市有温泉 3，市有区営温泉 65，区有区営温泉 19 で計 105 か所としている．2014 年大分県生活環境部調べでは 58 か所だが，筆者調べで実数は 70 ～ 80 か所と想定される．共同浴場数で全国最多の長野県の自治体として最も多い諏訪市の 62 か所（2012 年），2 位の山ノ内町 53 か所（同）をしのぎ，全国最多の共同浴場を擁するのは依然として別府市とみなされる（石川，2012）．

6. 2　温泉資源の持続的利用に適した共同管理

明治 10 年代以降，全国的に掘削開始による湧出量の増大に支えられ，また，地租改正以降の温泉資源と利用施設の個人所有化の促進に伴い，温泉地の宿に「内湯」が普及，共同浴場は「外湯」と呼ばれるようになって立場は逆転した．しかし歴史的にみれば，温泉地本来の入浴の場は基本的に共同浴場であり，共同浴場は温泉地の原点と言える．

至る所に温泉が湧く別府は「家毎に湯あり」（古川古松軒『西遊雑記』，1783）という恵まれた状況のため，内湯化も早かった．江戸時代に「湯株」を持つ 18 名ほどが内湯を持つ宿を経営していた（『別府市誌』，1933）．温泉を穿つには湯株を持つ必要があったから，温泉資源保護の観点からみると一定の合理性を有していた．

別府も明治半ば以降「湯突き」という上総掘りに始まるボーリング時代を迎え，温泉資源保護の問題に直面した．別府が大切に残している共同浴場，地域による温泉の共同利用と管理は，今日で言えば「コモンズのガバナンス」につながり，温泉資源の持続的利用に大きな示唆を与えていると

言えよう.

引用文献

熱海市史編纂委員会（1967）：熱海市史，上巻，165-172，熱海市，静岡.
熱海温泉誌作成実行委員会（2017）：熱海温泉誌，20-21，熱海市，静岡.
髙橋一樹（2017）：中世社会における「熱海」，熱海温泉誌，30-45.
寺島良安（1712）：和漢三才図会巻之五十七・水類「海泉」.
由佐悠紀（2017）：地球科学的にみた熱海温泉—その生成機構，熱海温泉誌，274-285.
石川理夫（2018）：温泉の日本史，10-11，中公新書，東京.
石川理夫（2015）：日本の温泉神の成立構造と特質，温泉地域研究，**25**，1-12.
別府市観光協会編（1963）：別府温泉史，114-117，いずみ書房，東京.
別府市（2003）：別府市誌，第1巻，178，224-226，別府市，大分.
石川理夫（2012）：温泉利用の公衆浴場数全国一の長野県における共同湯の現状，温泉地域研究，**19**，1-10.
別府市教育会（1933）：別府市誌，467，別府市，大分.